

科学技術の潮流

JST研究開発戦略センター

(269)

DBの存在感

研究評価には、論文の評価に使われてきた研究者同士で成果を評価する「ピアレビュー」が長らく用いられて、資金配分の際にも重要な役割を果たしている。日本でも研究資金提供機関が採択時の評価に採用しているが、関係の近い研究者を特別視する傾向や、若い研究者を過小評価してしまう可能性があるという課題もある。一方で、2000年代から大規模な論文

者の採用および昇進など懸念される。どの評価をする場でも、論文数や引用数といった定量的な指標に頼り過ぎると、論文以外の多様な成果を反映できないなどの悪影響に関する議論が起きてい

責任重視の動き

その流れを受けて、欧州を中心いくつかの団体から、研究の質を捉えた質の高い評価の推進を訴える代質を求め、ピアレビューは、質の高い研究を適切に評価するためには、新たな発想による標は補助的な使用に留め、新しい研究提案が採られるべきだとする。日本でも東京大

研究評価の未来、各国で議論



科学技術振興機構(JST)研究開発戦略センターフェロー(STI政策基盤ユニット) 菊地 乃依瑠

政策研究大学院大学博士課程在学中。非営利団体職員や大学職員として科学技術分野の取材、広報、研究支援業務に従事後、22年より現職。研究開発評価や人材育成施策に関する調査を担当。

評価方法による利点と課題

評価方法	利点	課題
ピアレビュー	研究の質を専門的な目線から評価できる	関係の近い研究者の特別視や若い研究者を過小評価する可能性がある
定量的指標	評価に客観性を持たせることができる	論文以外の多様な成果を捉えにくい

CRDS作成

学などが宣言に署名し、組織内での評価の仕組みを変えつつある。欧州では資金提供機関などのネットワークが母体となり、22年に研究評価改革を進めるための有志連合CoAが組織された。研究の本質的な価値を評価している。

英国でもメタサイエンス(研究手法や評価などの研究活動を対象とした研究)に関するコンソーシアムや研究開発プログラムが立ち上がり、評価のあり方に関する検討が進められている。

わが国でも日本学术会议により21年に同様の趣旨の提言がなされた。諸外国での研究評価に関する議論を把握しながら、日本の研究評価の仕組みについて俯瞰的に考え、不断の見直しをしていくことが重要である。

(金曜日に掲載)